のことで，吉沢専務ほか職員の苦心と努力はよく存じております。

会長就任１年後の49年には鴻巣から移転の研究所が牛久町に新装成って，その竣工披露を協会創立10周年の記念式典と共に挙行することができました。この移転拡充は河田会長時代に計画され，吉沢・田口・天辰さん等の並々ならぬ苦労を経て実現したもので，特に天辰さんの用地取得のための戸別訪問交渉には深く感銘しました。その後も研究施設，試験用地，環境整備等の充実に努め，53年に多年生雑草試験用の畑１haを新造成，55年に実験室を増設して文字通り旧倍となりました。

研究所の施設充実と共に事務能率の向上も重要ですので，数年前から自前の事務所で，充分なスペースをとって仕事ができるよう植調会館の建設を志していましたが，これも吉沢・田口さん等の努力で二転三転の後，55年８月に完成，12月に植物調節剤利用開発普及30周年の記念式と共に盛大におひろめすることができました。

この間，雑草防除技術についても次々に問題が起こりましたが，吉沢・鈴木・小沢さん等が中心になって適切に対処しました。すなわち，前から問題の環境汚染はこの頃になって対策が具体化し，薬剤の残留毒性について分析の実施や委員会による検討がなされるようになったが，除草剤の累積的影響を心配して昭和49年に除草剤永年使用による土壌・作物・微生物の反応の調査研究を主要除草剤について開始しました。続いて50年に少量散布，52年に体系是正，非農耕地の多年生雑草の除草剤，53年には生薬使用の増加に対応して強還元田での安全使用法，転換畑用特に大豆麦類の除草剤，水田除草剤の水産動植物に対する安全使用，55年に畑地における細粒除草剤の利用等に関する諸試験を実施しており，何れもメーカーや農家，広く社会の要請に応える先取的発想と思っています。

次に除草剤の普及について特筆すべきは，ブラジル植調の設立であります。これも吉沢専務の発想で，今後の需要拡大は海外進出を計るべしと考え，ブラジルを主とする南米諸国を好適地と判断したからで，竹下さん等の奮斗で55年１月に設立をみました。国内では既設の東北・北海道支部に続き48年北陸，50年九州，52年近畿中国四国支部が発足しました。このように植調は幹部の発想と職員の協力により，外部の信頼を得て形も内容も向上して参っています。こんな順境のうちに退任できるのを真に倖わせに思います。これからも誠実一途に処して，植調協会のさらに発展することを念願して，退任の挨拶と致します。

植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典開催す

植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典実行委員会

1. ま え が き

除草剤が，水稲作において，わが国ではじめて試験されたのは，2,4－Dの利用が本格的に試験を始めた23年からである。24年春には試験成

績の検討会がもたれ，25年３月10日，農薬としてはじめて登録（登録会社：石原産業・日産化学）され，関係当局の慎重な技術指導によって農家に普及されはじめてから，はや30星霜を重ねるにいたった。

この間，除草剤をはじめ生育調節剤などの植物調節剤利用開発試験が数多く実施され，多くの薬剤が農薬として登録され，一般農家に利用されるようになった。ことに，除草剤の普及によって農業の近代化が促進され，なかでも，水稲作では水田除草の重労働から農民を解放したことは，何人も否定することはできない。このように，意義ある薬剤の開発や普及に従事してきた者が一堂に会し，互いにその労を犒いあうことは，今後の植物調節剤開発に活力を与えることにもなり，誠に有意義である。そこで，これを記念し，各種行事の開催が提唱されたのは，２月29日，第１回準備会を開催した時点にさかのぼる。この準備会には，農林水産省農蚕園芸局・農林水産技術会議事務局関係官，民間側より石原産業株式会社・日産化学工業株式会社・保土谷化学工業株式会社・三井東圧化学株式会社・クミアイ化学工業株式会社，それに全国農業改良普及協会，日本植物調節剤研究協会等の関係者が集まり，協議した結果，植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典実行委員会を関係者で組織し，12月13日（土曜日）に，タカラホテル（東京都台東区東上野２－16－５）において，「植物調節剤利用開発普及三十周年記念行事」を開催することとし，記念式典(10～12時)と記念祝賀会（12～14時）を行なうことになった。

写真１．　植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典において功労者表彰を受ける受賞者

この記念式典では，除草剤・生育調節剤等の利用開発普及において，研究・普及・民間部門で特に貢献された者を表彰することとなり，10月３日に表彰審査委員会を開催し，徳安健太郎氏が中央審査委員長兼普及部会長，馬場赳氏が研究部会長兼水稲・畑作分科会長，清水茂氏が園芸・特作分科会長，浦野啓司氏が民間部会長となって審査した結果，被表彰者数総計221名，それに17薬剤を加えて表彰することになった。

記念式典当日は，前日の雨天はどこへやら，一点の雲なき晴天に恵まれ，植物調節剤利用開発の前途を祝福してくれているかのようであった。この記念式典の参加者は，早朝から来場し，総参加者数は約550名にのぼり，実に盛大な記念式典となった。ここに，記念式典と記念祝賀会のあらましを紹介し，植物調節剤利用開発普及に献身してきた者に対する賛辞が，心の慰めとなれば幸いである。

2. 記　念　式　典

この式典は10時より，吉沢長人委員（日本植物調節剤研究協会専務理事）の開会の辞から始まり，この記念式典実行委員会会長戸苅義次(日本植物調節剤研究協会会長）より，次のような挨拶があった。

「皆さん，おはようございます。本日は，ご案内いたしました三十周年の式典に多数ご出席いただきまして，ありがとうございます。

写真 2.　記念式典で式辞をのべる実行委員会会長戸苅義次氏

ご承知のように，除草剤としての 2,4－D，今は 2,4ＰＡと申しておりますが，戦後ただちにわが国に紹介されたのでありますが，本格的な研究は23年からでありまして，25年に農薬として登録され，普及に移されたのでございます。23年から25年にかけての時期を除草技術の起点とすれば，本年あたりがちょうど30周年になるという次第でございます。

この30年間の除草剤による除草技術の発展はまことに目ざましいものがございまして，普及初年の25年，水田 57,000 ha に 2,4－Dが適用されたのでございますが，今は水田のほかに畑や樹園地などに拡大され，各種除草剤の使用面積は延面積で 9,000,000 haと，実に 160 倍に増加しております。また，除草剤の種類も，初めて 2,4ＰＡが適用された頃に比べますと，だいぶ種類もかわりまして，ＰＣＰ，サターンＳ，ＭＯ，マメットＳＭ，グラモキソン，シマジンなどというふうに，水田用が58，畑地用が69剤と，有力な除草剤が開発利用され，わが国従来の除草法を根本的に変えました。おそらく，農家が喜んで受け入れてくれた技術のうちの最たるものと思われるようになっている次第でございます。

しかし，除草剤発展の裏には，いろいろな問題がございまして，魚毒であるとか，残留毒性，薬害等の諸問題が次々と起こりまして，そのつど，衆知を集め，まじめに解決してまいりました。そうして，常に海外の新知見を取り入れる，新薬剤の合成，剤型の改良とか薬剤の混合によって補完しあうというようにして剤の創出に努める。そのほか，作用特性，植物の生態的な特性，こういうものを踏まえて体系的あるいは地域別の使用法を確立いたしました。これらを行政に盛りこんで，農家への普及というこの一貫した除草技術の定着に，官と民，研究と行政が密接に協力して今日にいたりました足跡というものは，振り返りまして，まことに清潔でありましたし，また充実したさわやかなものを感ずることを幸せに存じます。

技術の進歩に際限はありませんが，除草剤の利用開発を，20周年，25周年というふうに５年ごとに記念式典をあげてまいりました。本年は普及に入ってから30年になりますので，この式典を開催することにいたしました。この記念式典の開催につきましては，日本植物調節剤研究協会が単独で開催するより，その会員を構成員として，みんなで記念式典を行なうほうが望ましいというような考えから，私はこの式典実行委員会の会長に選任されまして，関係各位のご協力により，本日開催の運びとなった次第でございます。

つぎに，本日の式典は，除草剤を主といたします植物調節剤利用開発普及三十周年記念のお祝いでありますが，このほかに申し上げたい第一点は，この除草剤の進歩と密接に関係がある日本植物調節剤研究協会が創立以来16年になり，その間になしてきた仕事の内容であります。除草剤の試験は，当初は当時の農林省の農林水産技術会議の水稲係が担当していたのでありますが，事業が拡大するにつれ，独立機関を設けた

いというような意見が出てまいりました。それに対しまして，当時の農林水産技術会議の小倉会長から，単なる試験斡旋機関でなく，新薬剤利用法の開発研究を推進し得るような研究部門をあわせて持つように，というご指導があったわけでございます。この趣旨にそいまして，日本植物調節剤研究協会は設立，運営され，はじめ鴻巣に設けた研究所を茨城県牛久町に移転，その後も拡充して，植物調節剤の開発研究に努めている現状であります。

第二点は，日本植物調節剤研究協会の事務能率増進のために，植調会館を設立したいという願望がありましたが，それがこのたび落成し，竣工のご披露と祝賀を本日の記念式典に含ませていただきたいということでございます。この会館の建設には多くの費用が必要となり，そのために経常経費の累年節約に努めてその費用を捻出し，それにクミアイ化学，ＩＣＩ，そのほかにグラモキソン・エックスゴーニ・マーシェット・ショウロンＭ・アビロサン等の普及会からご協力いただきました。ここにあらためて，感謝申し上げる次第でございます。

第三点は，以上の植物調節剤利用開発普及三十周年，それから植調会館竣工の祝賀に関連してご協力いただいた方々の表彰を行ない，いささかその労に報いたいということでございます。

このように，いろいろなものを盛りこんで，たいへん欲張った今日の記念式典でありますが，以上の趣旨をご理解願いまして，この式典をともに喜び，お祝いしていただき，将来ともご指導とご鞭達を賜わることをお願い申し上げ，式辞といたす所存でございます。どうもありがとうございました。」

つづいて，農林水産大臣亀岡高夫代理（農蚕園芸局植物防疫課長管原敏夫氏）より，次のような祝辞が読み上げられた。

写真 3.　農林水産大臣亀岡高夫氏の代理として祝辞をのべる管原敏夫氏

「本日，ここに植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典が挙行されるに当たり，一言お祝いの言葉を申し上げます。

顧みまするに，昭和23年に除草剤による雑草防除という画期的な研究が開始され，25年には2,4－Ｄが除草剤として初めて農薬登録を受けて以来30年の歳月が経過しました。その間，わが国農業の特殊性に即しつつ，農作物の栽培，収穫物の貯蔵等の各般の分野で，新剤の導入，開発およびその利用技術の普及等が行なわれ，植物調節剤は農業労働の軽減と生産の安定，拡大に大きく貢献してまいりました。本日ここに，30年めの記念すべき年を迎えることができましたことは，ひとえに関係各位のたゆまぬ努力のたまものであり，心から敬意を表する次第であります。

申すまでもなく，農業は食糧の安定供給と国土の保全という重要な役割を果たしておりますが，今日の我が国農業を取り巻く諸情勢は，米の過剰をはじめとする農産物需給の不均衡，経営規模拡大の停滞等まことに厳しいものがあります。

このような情勢に対処し，農業の将来に明るい展望を切り開き，国民の農業に対する期待に

応えてゆくためには，80年代の農業のビジョンを明らかにし，長期的視点に立った政策の推進を図ることが肝要であります。このため，昨年6月以来，農政審議会において，80年代の農政の基本的方向および農産物の需要と生産の長期見通しについて審議，検討をお願いしておりましたが，先般その答申を受け，農産物の需要と生産の長期見通しを閣議決定したところであり，今後はこの答申に沿って，具体的な施策の検討を行ない，逐次実施に移すこととといたしております。

しかしながら，これらの施策が所期の成果を達成し，食糧の総合的な自給力の維持向上を図るためには，農業技術の発展により，生産性の高い農業を確立していくことが極めて重要であり，その意味でも，除草剤をはじめとする植物調節剤の開発利用と適正な使用の普及が，農業の各分野において，一層推進されることを期待するものであります。

皆様方におかれましては，この30周年を契機として，さらに決意を新たにされ，農業生産の維持発展のため，より一層ご尽力されんことを祈念いたしまして祝辞といたします。

昭和55年12月13日　農林水産大臣亀岡高夫」

引き続き，日本植物調節剤研究協会設立当時の農林水産技術会議会長小倉武一氏より，次のような祝辞をいただいたので，紹介する。

「植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典を挙行されるにあたりまして，私のような者にお招きいただきまして，たいへん光栄に存ずる次第でございます。

農薬の研究等の仕事につきまして，農林省時代に若干経験，関係したことがございますが，もう数年以上そういう方面の仕事と離れておりますので，久しぶりにこういう会合に来てみますと，存じ上げている方々のお顔もみえて，たいへん懐しく存ずる次第であります。

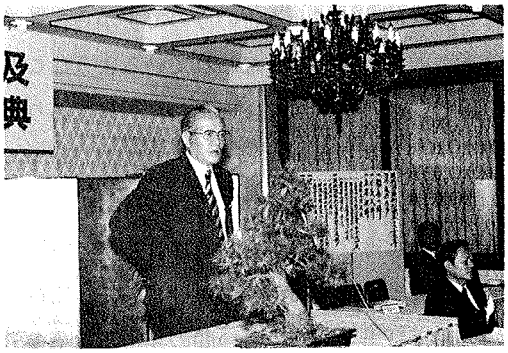

写真4.　祝辞をのべる日植調設立当時の農林水産技術会議会長小倉武一氏

私と植物調節剤との最初の出会いは，昭和27年，農業改良局という局が当時ありまして，その頃普及課といいましたか，原政司さんが課長で中尾さんという技官がおられて，除草剤の利用普及に熱心に取り組んでおられた様子を拝見しました。その後，29年に農業改良局へまいりまして，またそこで若干の接触を持ったわけであります。

先ほど戸苅会長さんのお話にありましたように，農林水産技術会議の会長時代に，この協会をつくろうじゃないかというお話があって，確か当時の農業技術研究所の所長をされておったと思いますが，馬場さんその他の方々がお見えになりまして，ご相談を受けたことがあります。そのとき，むろんこれは農林水産技術会議の所管になるんだろうと思っておりましたところ，当時の農林省の官房文書課で，農林水産技術会議というのはそういうものを所管できないんだということをいわれたということで，これは筋の通らない話だけれども，こんなことでゴネていても大人気ないと思って別に異議を申し立てなかったのですが，どうも今お聞きすると，現在も農林水産技術会議の所管でなくて植物防疫

課の所管になっているというのですから，あのときのことが現在も行なわれているようなことを感じ，当時を懐しく思いだした次第であります。

除草剤というと，今日では当然な話で，どうということはないのかもしれませんが，昭和20年代の後半以降，30年代にかけまして，農村の婦人および男子の夏の暑い間の非常な除草の労働から解放するというようなことになったのが，この除草剤の利用であります。いつか農家の方の書いた本で“おっぽろな牛”という言葉を見ましたけれども，除草に苦しむ農家の男女は，まさに“おっぽろな牛”のようなものであった。それから解放されてどんなに嬉しく感じているか，というような記事でありました。これらは，皆様方の非常なご努力の成果であろうと思います。今後ともひとつ，除草剤に限らず，植物調節剤の開発利用に専心されますように念願する次第であります。

先ほど，農林水産大臣のご祝辞を聞いていまして思いましたのですが，今日の日本の農業というのは，たいへんな危機の状況にあるのではないか。このような状況のままで推移すれば，やがては我が国の農業というのは，ほとんどなくなるに等しい。部分的には若干のものは残るでしょうが，農業の対象というものはなくなるのではないか。現在もすでに衰退の過程に入ってきている。そして，21世紀を待たずに衰滅するのは目に見えているのではないかという気が，いたすわけであります。誰もそういうことを申す人はないかも知れませんし，そういうことを言って人をびっくりさせるということも適当ではないというようなことで，わかっておってもそういうことをおっしゃらないのかも知れませんが，どうも私は，外から農業の事情を眺めていると，たいへんな衰滅の危機に瀕しているというふうに思うわけです。

そういう時期ですから，大部分の人は，特に農家の人々は意気消沈するというようなことになるでしょうし，また農業関係の技術あるいは行政，あるいはその他の仕事に従事されている人々も意気消沈される，というようなことになっているのではあるまいかという憶測をする次第であります。ところが，実はそうであっては困るので，この危機の克服というような義務こそ，大事な，また後世の人々からたたえられるような仕事はないのではないかというふうに思います。

皆さん方，本日お集まりの方々は，植物調節剤のことはご存知でありますが，その他のことを通じて，いろいろ農業にかかわりのある仕事をなされておりますので，日本農業をひとつ再興されるように，あるいは再建されますように，今後とも格段のご努力を願いたい。かように存じます。今日のおめでたい日に，かようなことを申し上げるのは似つかわしくないかも知れませんけれども，祝辞に代えて，一言のべさせていただいた次第であります。

ご清聴，どうもありがとうございました。」

つづいて，都道府県農業試験場長会会長早川

写真 5.　祝辞をのべる都道府県農業試験場長会会長早川浩氏

浩氏（愛知県農業総合試験場長）より，次のような祝辞をいただいた。

「本日，ここに植物調節剤利用開発普及三十周年記念および植調会館竣工の式典に臨み，都道府県の農業試験場長会を代表し，お祝いの言葉を申し上げる機会を得ましたことは，私にとりましても大きな喜びであり，まことにご同慶の至りに存じます。

顧りみますと，2,4 PAが除草剤として我が国へ紹介，導入されたのは，戦後間もない昭和23年のことであり，これは我が国の農業にとり，まさに画期的なことでありました。

以来，新除草剤の開発・導入・改良等が相つぎ，一方，大学を始め，国および都道府県の試験研究機関において，その作用特性ならびに適用性についての試験研究が実施され，その成果が普及に移されて，農家は多年にわたる雑草との闘いから，一歩一歩解放されて参りました。

こうした除草剤等を利用した農業生産技術の変革は，農業機械の改良・発達と相まって，省力技術としての労働生産性の向上のみならず，土地生産性の向上にも大きな役割を果たし，農業近代化への道を開いたものとして，高く評価すべきものと存じます。

ところで，当初，水田作を中心とした雑草防除は，その後，畑作・園芸・草地・蚕糸・茶園・林地・非農耕地へと対象が拡大され，薬剤による化学的防除とともに，耕種的・機械的・生態的防除法の発達を促がし，他面において作物の生育調節剤によるケミカルコントロールならびに生育調節資材を含め，実に目覚ましい発展を遂げ，ここに30年の歴史を重ねました。

この間，より安全かつ有効な植物調節剤の利用開発・普及を目指し，各界の関係者がたゆまざる努力を傾注され，今日の輝やかしい成果をあげられたことに対し，本日表彰の栄に浴される方々をはじめとして，関係の皆様に衷心から感謝と敬意を表する次第であります。

また，日本植物調節剤研究協会におかれましては，除草剤・生育調節剤および資材等の開発に関する調査・研究，薬剤に対する適用試験業務，試験研究成果の発表，文献・印刷物等の刊行，海外との技術交流等を主要事業として，昭和39年に発足されて以来，これら諸事業の推進を通して，農林業の発展に貢献されたことは，まことに大きなものがあります。

また，昭和43年には独自の研究所を開設され，本年，30周年記念事業として，植調会館を竣工されましたことは，まことに慶賀の至りに存じます。

どうか今後とも，斯界の中核として，試験研究機関とともに指導的役割を果されんことを願い，益々発展を祈るものであります。

今や，農業をとりまく諸情勢は，まことに厳しいものがあります。本年の冷夏に見られるごとく，また，世界各地で異常気象に基づく不作が報ぜられております。人口の増加に伴なう世界的な食糧危機が憂慮されるなかで，我が国としても国民食糧の安定的供給，自給率の維持，向上を図る必要から，国内農業生産力の増強は今後益々その重要性が高まるものと考えます。こうしたなかで，除草剤を始めとする植物調節剤の利用開発・普及は，農林業の各分野において，一層の充実，拡大が要望されるところであります。

その意味におきまして，本日の記念すべき式典にご列席の関係各位に対し，今後一層のご尽力を賜わりますようお願い申し上げて，祝辞といたします。」

つづいて，全国農業改良普及職員協議会会長

青木茂松氏の代理として星鉱治氏（全国農業改良普及協会専務理事）より，つぎのような祝辞が読み上げられた。

写真 6.　全国農業改良普及職員協議会会長青木茂松氏の代理として祝辞をのべる星鉱治氏

「本日ここに，植物調節剤利用開発普及三十周年の記念式典が開催されるに当たり，全国の改良普及職員を代表して，一言ご祝辞を申し上げます。

三十周年，おめでとうございます。心からお慶び申し上げます。

ご案内のとおり，改良普及員は農民に対する新技術の普及を通じ，農業の経営，生活の改善向上を実現することを主要な任務としておりますが，その際，新しく開発される諸資材が重要な媒体となっており，新資材の出現によって，農業の技術革新が大きく前進した事例は枚挙にいとまのないほどであります。植物調節剤の開発と普及は，まさにその好例であります。昭和23年，農業改良普及事業の発足とほぼ時を同じくして出現した2,4－D，そしてそれにつづく多くの除草剤は，米を中心とした農業の生産技術の改善に，はかり知れない貢献をし，それら除草剤の普及に，普及員は大きな情熱を傾け，農家もそれによって農作業の省力化その他の面で，まことに大きな利益をえて参ったのであります。

除草剤につづいて，多くの生育調節剤が利用に供され，改良普及員もその普及に真剣に取り組んで参りました。そして，ぶどうをはじめ多くの作物の商品化の増進等にいちじるしい成果をあげてきたのであります。

本日，植物調節剤の利用開発普及に功績のあった方々のなかに，多くの改良普及職員がふくまれ，功労者表彰を受けられることになっておりますが，私も普及職員の一人として，まことに光栄に存ずる次第であります。

ところで，いま，過去の生産第一主義の日本農業は大きく脱皮を迫られ，地域ぐるみの生産組織の形成と地域農業の確立，そして安全で安価な国民食糧の確保が強く要請されております。こうした新しい事態にふさわしい植物調節剤の開発とその普及が，新たな課題になっていると思われます。

私ども普及職員も，そうした植物調節剤の開発をのぞむと同時に，農家のため，地域の農業のために，それらの正しい普及と取り組んで参る所存でありますことをお誓いして，私の祝辞にかえる次第であります。

昭和55年12月13日

全国農業改良普及職員協議会会長　青木茂松」

引きつづき，農薬工業会会長菊池浦治氏より，つぎのような祝辞をいただいた。

写真 7.　祝辞をのべる農薬工業会会長菊池浦治氏

「本日，植物調節剤利用開発普及事業三十周

年記念式典ならびに植調会館竣工のご披露にあたり，農薬業界を代表してお祝辞を申し述べる機会を得ましたことは，まことに光栄であり，ご同慶にたえません。

たまたま先般，植物防疫事業三十周年記念の事業がとり行なわれた直後のこととて，私共関係者にとりましては，80年代第1年目にふさわしい大きな節目を迎えたものであります。

今から30年前，2,4－Dが導入されてから，植物調節剤利用開発の普及に関係された諸先生方の並々ならぬご努力によって，農家にとっては四つんばい農業がなくなり，労働時間も合理化され，近代農業の道が開かれたものでありまして，関係者の功績に対し，心から敬意を表するものであります。

一方，私ども農薬企業にとりましても，除草剤をはじめとして各種植物調節剤は，他の農薬と同様に農産物の安定的生産に極めて重要な役割を果すことに着目し，早くから研究開発に意欲を燃やしているものでありますが，諸先生方のご指導もあって，最近では農薬の中でかれこれ30％に近い位置を占めるようになっております。

今や国の内外を問わず農薬をとりまく諸問題がまことに多様化しておりますとき，私ども企業といたしましても，生産資材としての農薬の必要性を益々強く認識し，一層有効かつ安全な農薬の開発に邁進する所存でありますので，本日の記念すべき節目を期して，植物調節剤の開発普及事業が，益々発展されますことを祈念して，お祝辞といたします。」

つづいて植物調節剤利用開発普及功労者の表彰に移ったが，功労者表彰選考中央審査委員長徳安健太郎氏より，つぎのように選考経過が報告された。

写真8.　功労者表彰の選考経過報告をする中央審査委員長徳安健太郎氏

「本年は，除草剤2,4ＰＡが我が国ではじめて農薬として登録され，普及に移されてから満30年となります。これを機に，除草剤および生育調節剤の利用開発と普及に従事してきた者が一堂に会し，その労に報いることは誠に有意義なことであります。

そこで，この記念行事を行なうため，「植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典実行委員会」が昭和55年2月29日に組織され，財団法人日本植物調節剤研究協会主催，農林水産省後援のもとに，本日，記念式典が開催され，その一環として功労者の表彰が行なわれることになりました。

そのため，6月10日に第2回実行委員会を開催し，表彰者数・被表彰者の推せん依頼・審査委員の選任および委員会の開催期日等について協議し，表彰審査委員（下記の通り）を選任し，6月19日付で，研究・普及部門の水稲・畑作については日本植物調節剤研究協会各支部長，野菜・果樹・蚕糸・茶業・草地については国立専門試験場長，芝生については専門調査委員，民間部門については各評議員に推せん依頼をお願いし，9月12日までに推せん状をとりまとめ，10月3日に表彰審査委員会を開催いたしました。

表彰審査委員会は，研究部門・普及部門・民

間部門に分け，研究部門のみはさらに水稲・畑作分科会，園芸・特作分科会に分けて慎重な審査を行ないました。特に園芸・特作分科会では，当初は除草剤の試験研究者の中から功労者の選考を行なう予定でありましたが，生育調節剤の試験研究に特に功績のあった者は，生育調節剤の部門で表彰する方が適切であるとの意見が強くだされたため，野菜・果樹・桑・茶については除草剤と生育調節剤に分けて審査いたしました。その結果，研究部門175名，普及部門31名，民間部門15名，表彰者数計221名，それに表彰薬剤17剤となりました。

ここに，表彰の審査経過をご報告申し上げると共に，この意義ある記念事業が，除草剤・生育調節剤の開発利用研究を，さらに推進せしめる糧となることを願う次第であります。」

功労者表彰選考審査委員

中央審査委員長　徳安健太郎

＜研究部会＞

委員長　馬場　赳（水稲・畑作分科会長）
委　員　清水　茂（園芸・特作分科会長）
　　早川　浩
　　竹松　哲夫
　　千野　知長
　　潮田　常三
　　松本　顕
　　坂井　健吉
　　太田　保夫
　　柿本　彰
　　宮原　益次
　　徳永　美治
　　草薙　得一
　　中沢　秋雄
　　栗山　尚志
　　菅原　裕幸
　　千葉　勉
　　山崎　利彦
　　西浦　昌男
　　平峯　重郎
　　青野　英也
　　北浦　澄
　　小野　松治
　　丸岡　詮
　　大泉　久一
　　角田　三郎

＜普及部会＞

委員長　徳安健太郎
委　員　管原　敏夫
　　田口　俊郎
　　吉田　孝二
　　内藤　進
　　星　鉱治
　　岡田　一良

＜民間部会＞

委員長　浦野　啓司
委　員　滝田　清
　　栗西　秀幸
　　大池　峯一
　　石本　信夫
　　寺田　楽
　　上井忠太郎
　　津村　武夫
　　石井　潤一
　　西田　哲夫
　　武田　公一

（以上44名，順不同・敬称略）

選考経過報告後，直ちに表彰式が行なわれ，次の通り，受賞者の氏名が事務局より読み上げられた。

I．植物調節剤利用開発普及功労者の部

1. 研　究　部　門

(1)　国立関係（含大学他）

三島　京治（除草剤部門・水田作）
近内　誠登（　同　　上　）
村上　利男（　同　　上　）
土井　康生（　同　　上　）
松本　顕（　同　　上　）
工藤　純（　同　　上　）
古谷　勝司（　同　　上　）
田中　孝幸（　同　　上　）
和田　学（　同　　上　）
加藤　一郎（除草剤部門・水田裏作）
江口　末馬（　同　　上　）
渡辺　泰（除草剤部門・畑　作）
西入　恵二（　同　　上　）
池田　正昭（　同　　上　）
中沢　秋雄（　同　　上　）
高林　実（　同　　上　）
山田　英一（除草剤部門・野　菜）
松尾　誠介（　同　　上　）
小餅　昭二（　同　　上　）
福田　博之（除草剤部門・果　樹）
間　和夫（除草剤部門・桑　園）
小野　松治（　同　　上　）
栗林　茂治（　同　　上　）
野本　達郎（除草剤部門・草　地）
（小計24名）
中山　正義（生育調節剤部門・水稲作）
原田　二郎（　同　　上　）
平岡　博幸（　同　　上　）
井口　武夫（生育調節剤部門・畑　作）
川田　穣一（生育調節剤部門・野　菜）
山崎　利彦（生育調節剤部門・果　樹）
河瀬　憲次（　同　　上　）
鈴木　邦彦（　同　　上　）
千葉　和彦（生育調節剤部門・果　樹）
大東　宏（　同　　上　）
大山　勝夫（生育調節剤部門・桑　樹）
返田　助光（　同　　上　）
（小計12名）
（国立関係計36名）

以上の受賞者の代表として，中沢秋雄（除草剤部門）・山崎利彦（生育調節剤部門）氏が表彰状を受けとる。

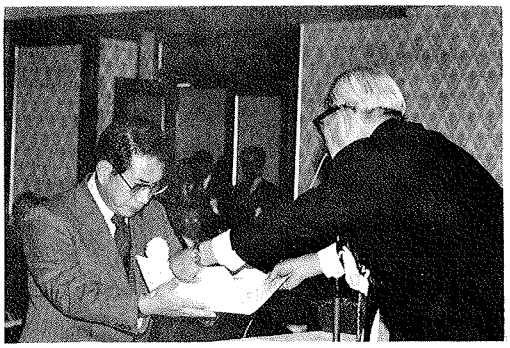

写真 9.　国立関係除草剤部門の代表として受賞する中沢秋雄氏

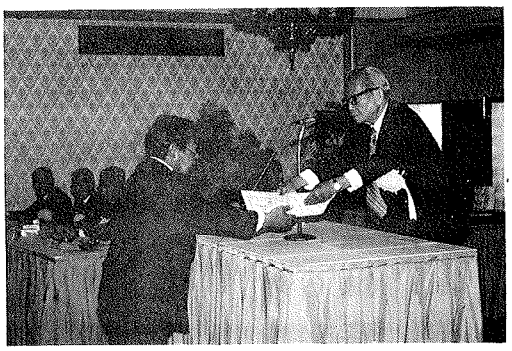

写真 10.　国立関係生育調節剤部門の代表として受賞する山崎利彦氏

(2)　都道府県関係

山崎　信弘（除草剤部門・水田作）
長内　俊一（　同　　上　）
森脇良三郎（　同　　上　）
谷川　晃一（　同　　上　）
山崎　一彦（　同　　上　）

小野　清治（除草剤部門・水田作）
千葉　隆久（　同　　上　）
及川　俊昭（　同　　上　）
武田　昭七（　同　　上　）
岡田　晃治（　同　　上　）
吉田　富雄（　同　　上　）
長島　房吉（　同　　上　）
今井　良衛（　同　　上　）
浅野孝三郎（　同　　上　）
畠山　武（　同　　上　）
高橋　耕二（　同　　上　）
島田　裕之（　同　　上　）
奥山　隆治（　同　　上　）
小川信太郎（　同　　上　）
竹村　三郎（　同　　上　）
堀　親郎（　同　　上　）
宮島　吉彦（　同　　上　）
宮田喜次郎（　同　　上　）
鈴木　金苗（　同　　上　）
滝沢　吉朗（　同　　上　）
伊藤　敏一（　同　　上　）
吉沢　清（　同　　上　）
岸本　章三（　同　　上　）
照内　正男（　同　　上　）
佐村　董（　同　　上　）
徳山　博康（　同　　上　）
平野　隆二（　同　　上　）
新田　英雄（　同　　上　）
岡武　三郎（　同　　上　）
滝広　徳男（　同　　上　）
内田　敏夫（　同　　上　）
酒井　勇夫（　同　　上　）
渡辺　全（　同　　上　）
高村　堯夫（　同　　上　）
木崎原千秋（　同　　上　）
藤原　帝見（除草剤部門・水田作）
松本　久夫（　同　　上　）
村社久米夫（　同　　上　）
後藤　磨澄（　同　　上　）
斎藤　博行（除草剤部門・水田裏作）
近藤　晃（　同　　上　）
米倉　正直（　同　　上　）
谷口　学（　同　　上　）
塩見　誠伍（　同　　上　）
越生　博次（　同　　上　）
世古　晴美（　同　　上　）
池田　正人（　同　　上　）
宮内　直利（　同　　上　）
武市　雅志（　同　　上　）
古川　定（　同　　上　）
中村大四郎（　同　　上　）
鎗水　壽（　同　　上　）
森　義雄（除草剤部門・畑　作）
上野　賢司（　同　　上　）
三好　一夫（　同　　上　）
伊藤　平一（　同　　上　）
小原　秋雄（　同　　上　）
鎌田　信昭（　同　　上　）
野崎　光夫（　同　　上　）
鎌田金英治（　同　　上　）
中村　元彦（　同　　上　）
酒井　友慶（　同　　上　）
渡辺　由勝（　同　　上　）
小中　伸夫（　同　　上　）
竹村　昭平（　同　　上　）
赤羽二三男（　同　　上　）
植栗　恭友（　同　　上　）
中島　勉（　同　　上　）
萩森　福督（　同　　上　）
中村　盛三（　同　　上　）

鬮内　孝之（除草剤部門・畑　作）
田爪　静夫（　同　上）
元田　徳廣（　同　上）
仲宗根盛雄（　同　上）
三木　英一（除草剤部門・野　菜）
高橋　聡夫（　同　上）
土屋　弘（　同　上）
岩館　信三（　同　上）
大友詔次郎（　同　上）
荻原佐太郎（　同　上）
佐藤　紀男（　同　上）
馬場　英實（　同　上）
玉田　明（　同　上）
森脇　宏爾（　同　上）
片岡　虎夫（　同　上）
池内　康雄（　同　上）
大西　忠男（　同　上）
西谷　国宏（　同　上）
大場　支征（　同　上）
斉藤　久男（　同　上）
工藤　仁郎（除草剤部門・果　樹）
神　昭三（　同　上）
熊谷　征文（　同　上）
山田　喜和（　同　上）
高橋　健二（　同　上）
河野　要（　同　上）
岩川　孝（　同　上）
柳沼　泰衛（除草剤部門・桑　園）
酒寄　健治（　同　上）
埴岡　靖男（　同　上）
清水　希信（　同　上）
太田　宏（　同　上）
井崎　利行（　同　上）
此本　晴夫（除草剤部門・茶　園）
川瀬　春樹（　同　上）
及川　寛（除草剤部門・草　地）
角田　三郎（除草剤部門・芝　生）
石橋　理男（　同　上）
森　薫（　同　上）
鍋島　英男（　同　上）
（小計15名）
山崎　季好（生育調節剤部門・水稲作）
武市　義雄（　同　上）
宮内　敏男（　同　上）
後木　利三（生育調節剤部門・畑　作）
船越　建明（　同　上）
萩生田邦雄（生育調節剤部門・野　菜）
渋川　三郎（　同　上）
村井　千里（　同　上）
高田　宗男（　同　上）
近藤　雄次（　同　上）
柏木　征夫（　同　上）
木戸　啓二（生育調節剤部門・果　樹）
橋本　登（　同　上）
星野　正和（　同　上）
柴　壽（　同　上）
田村　忠夫（　同　上）
沢辺　治之（　同　上）
中田　久雄（　同　上）
大石　良平（　同　上）
奥田　義二（　同　上）
土居　新一（　同　上）
濱地　文雄（　同　上）
廣田隆一郎（　同　上）
淵之上弘子（生育調節剤部門・茶　樹）
（小計24名）
（都道府県関係計 139 名）

以上の受賞者の代表として，小川信太郎（除草剤部門）・渋川三郎（生育調節剤部門）氏が表彰状を受けとる。

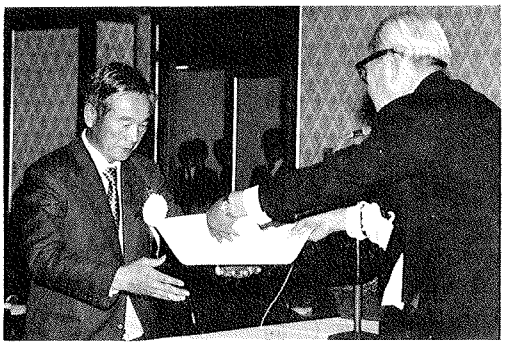

写真11. 都道府県関係除草剤部門の代表として受賞する小川信太郎氏

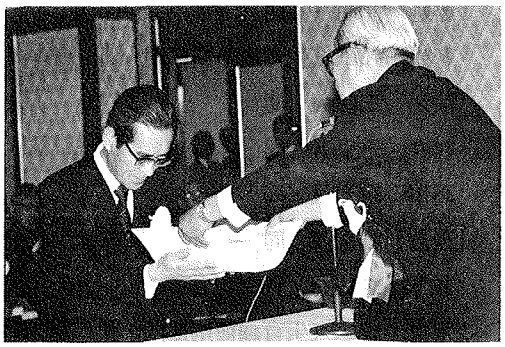

写真12. 都道府県関係生育調節剤部門の代表として受賞する渋川三郎氏

（研究部門受賞者合計 175 名）

2. 普 及 部 門

西　　勲
清原 悦郎
高 嶋　優
吉 田　浩
松 本　馨
星 野　一
田守 健夫
中野 幸雄
阿部 秀男
堀口 辰雄
真中多喜夫
斉藤 省三
赤井 正志
松 本　睦
杉 山　薫
福永 雅一
東　富 夫
石 脇　勇
石倉 満吉
南　茂 夫
蓮池 勝巳
平城 虎男
加藤 利隆
白石 憲郎
仁井田 光
南　又 衛
河内埜一之
島田 史郎
鍛治原俊夫
加 藤　擴
美 園　中

（普及部門合計31名）

以上の受賞者の代表として，平城虎男氏が表彰状を受けとる。

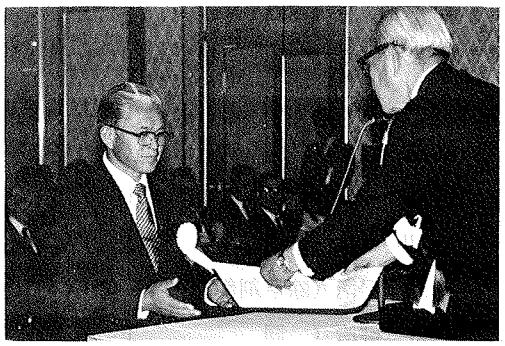

写真13. 普及部門の代表として受賞する平城虎男氏

3. 民 間 部 門

(1) 民間関係功労者

西山 隆三
木村 一郎

吉村　成芳
平田　保
嶺　昭彦
小淵　一夫
石田　精一
石井　潤一
石川　哲雄
小泉　順三
中村　弘
早坂　利将
田瀬　幸男
篠田　秀臣
宮本　聡
（小計15名）

以上の代表者として，平田保氏が表彰状を受けとる。

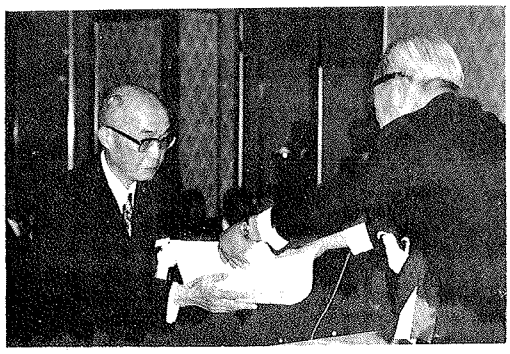

写真14. 民間部門の代表として受賞する平田保氏

(2) 薬剤関係

- ジメタメトリン・ピペロホス(アビロサン)粒剤
- クロメトキシニル（エックスゴーニ）粒剤
- DCMU（カーメックスD，ダイロン）粒剤
- MCPB・シメトリン・ベンチオカーブ(クミリードSM）粒剤
- IPC（クロロIPC）剤
- アトラジン（ゲザプリム）剤
- CNP・ダイムロン（ショウロンM）粒剤
- トリフルラリン（トレファノサイド）剤
- ベンタゾン（バサグラン）単剤および混合剤
- DNBP（プリマージ）乳剤
- フェンメディファム（ベタナール）乳剤
- ブタクロール（マーシェット）粒剤
- MCPB・シメトリン・モリネート（マメットSM）粒剤
- アラクロール（ラッソー）乳剤
- ジクワット（レグロックス）液剤
- リニュロン（ロロックス，アファロン）水和剤
- ヒドロキシイソキサゾール（タチガレン）剤

（以上17薬剤）

以上の代表者として，昭和電工(尼子一郎氏)が表彰状を受けとる。

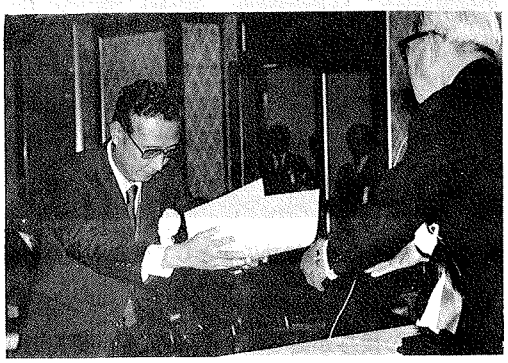

写真15. 民間部門薬剤関係の代表として受賞する昭和電工(株)尼子一郎氏

したがって，功労者表彰の合計は221名，それに上記の17薬剤となった。

Ⅱ. 日本植物調節剤研究協会永年勤続功労者の部

則武晃二，小沢啓男，田口　宏計3名の代表として，則武晃二氏が表彰状を受けとる。

写真16. 日植調永年勤続功労者の代表として受賞する則武晃二氏

Ⅲ. 植調会館建設功労者の部

長田耕栄（総合設備管理センター専務理事），株式会社聖建築設計事務所，イハラ建成工業株式会社東京支店に対し，植調会館竣工記念の一環として，感謝状を授与した。

写真17. 植調会館建設功労者として受賞する長田耕栄・石塚弘輝・伊藤猛氏

表彰状の授与が終って，平田保氏が受賞者代表として，次のような答辞を行なった。

「ご指名がありましたので，大変僭越ですが，植物調節剤の研究普及などに貢献したとして，利用開発普及三十周年の記念すべき日を迎えるに当たり表彰されました238名を代表いたしまして，一言お礼を申し上げます。

私共はそれぞれの職場におきまして，植物調節剤の開発，研究，実際の農地における望ましい適用方法，農家の実施に関する安全などの資料を提供して，その普及推進に努めて参りました。

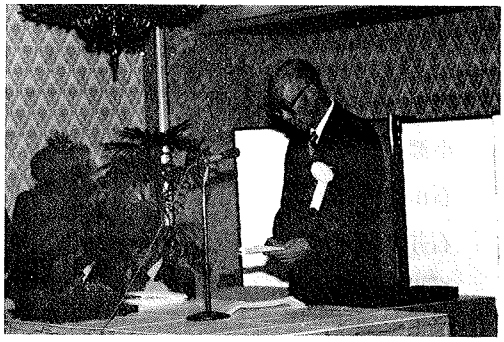

写真18. 受賞者代表として答辞をのべる平田保氏

この事が農作業の重労働から農民を解放し，農業生産の安定につくし，延いては消費者の利益に寄与するものであり，私共に課せられた責務であると信じて参りました。今後共できるだけ努力して農業の近代化と国民生活の安全などのため，奉仕して行きたいと存じます。

本日，植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典に於て表彰を受けましたことは，私共に対する温かいご鞭撻であると思い，各々の立場で更に一段と精進を重ねて参りたい所存でございます。

今後共，諸先生から更に厳しいご協力とご指導とを賜わりますようお願いすると共に，我が国の植物調節剤研究が，今日を契機にして更に一段と発展し，日本いや国際農業の興隆に大きく貢献いたしますよう衷心から祈念いたします。

以上，誠に簡単で充分意を尽していませんが，御礼の挨拶といたします。」

最後に，次のものより祝電をいただいたので列記する。

東北農業試験場長

中国農業試験場長

四国農業試験場長

果樹試験場口之津支場長

北海道中央農業試験場長
岩手県園芸試験場長
長野県農業総合試験場長
愛媛県農林水産部長
日本雑草学会会長
宇都宮大学雑草防除研究施設一同
武田薬品工業株式会社社長
日本農薬株式会社会長
明治製菓株式会社
協和銀行頭取
第一勧業銀行頭取
（以上15通）

祝電披露の後，閉会となったが，予定時刻より約30分早く，11時15分に閉会となった。

3. 記念祝賀会

この祝賀会は12時に鈴木照麿氏（日本植物調節剤研究協会理事・研究所長）の開会の辞にはじまり，戸苅会長より次の通り挨拶が行なわれた。

「先ほど別室で，三十周年記念式典を滞りなく終わりました。皆様のご協力によりまして，非常に厳粛に，また和やかに終わりました。厚く御礼を申し上げます。

ただいまより，この三十周年をお祝いいたしまして，祝宴に入りたいと存じます。皆さん，お互いに旧知の間柄でございますし，懐しい人，久しぶりの人，いろんな方々がお集まりでございます。この三十周年をお祝いいたしまして，快く過ごしていただければ非常に幸いと存じます。開会にあたりまして，大勢集まっていただきましたことを厚く御礼申し上げ，今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。」

次に，農林水産技術会議事務局長川嶋良一氏より，つぎのような祝辞をいただいた。

写真19. 祝辞をのべる農林水産技術会議事務局長 川嶋良一氏

「本日は，植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典にお招きいただきまして，ありがとうございます。ここに関係者のこれまでのご労苦に心から敬意を表しますとともに，ご参集の皆様方と共々，本日のめでたいよき日をお祝い申し上げたいと存じます。

近年における農業技術の進歩発展は誠に目ざましいものがありますが，その中でも除草剤をはじめとする植物調節剤とその利用技術の進歩は，誠に目をみはるものがあります。

昭和25年の2,4-Dの農薬登録により，水稲栽培に革命ともいえる省力安定技術をもたらし，爾来，各種作物にわたり，除草剤その他植物調節剤の開発普及が急速に進み，これが今日の我が国の農業生産を支えているといっても過言ではないと思います。

日本植物調節剤研究協会におかれては，昭和39年に設立されて以来，除草剤・生育調節剤に関するこれまでの技術を踏まえつつ，新しい実用化技術の開発のための試験に広範かつ系統的に取り組まれ，その安全な利用法を確立し，普及していく上で積極的な役割を果たされてきました。

最近においては，化学物質の土壌中への残留，蓄積等，環境問題に対しいち早く対応され，除

草剤使用の節減方策についても十分配慮して研究を進めておられると承知しており，その成果を期待するところであります。

さて，80年代の我が国農業は，農産物需給の均衡を図りつつ，生産性の高い農業を育成することが，重要な課題であります。この課題に取り組む上で，その基礎となる技術の開発，確立が緊要であり，試験研究に対する期待は極めて大きなものがあります。

国といたしましては，本年１月で筑波農林研究団地に11の場所が移転を完了しましたが，これらの専門場所が生み出した高度な技術を総合化体系化するため，農業研究センターを設置するなど，現在その再編整備につき検討を進めているところであります。

植物調節剤の利用開発面の研究につきましても，このような体制の下で，作物生理の研究，雑草や農薬の研究およびその体系的な利用技術等について，協会はじめ関係者各位との連携をとりつつ，一層の推進を図る考えであります。

植物調節剤利用開発普及三十周年を祝うこの時期に，協会の活動の本拠地としての植調会館が完成したわけでございますが，これはこれまでの関係者のご努力の結晶であるとともに，本会の今後の一層の発展を象徴するものであります。

植物調節剤の利用開発普及事業の一層の発展と関係各位のご健勝を心から祈念し，祝辞といたします。」

つづいて，全国農業協同組合連合会常務理事田中隆氏より，次のような祝辞をいただいた。

「本日は植物調節剤利用開発普及三十周年記念ということで，たいへんお目でたい祝宴が催されたわけでございますが，会長がたまたま不在でございまして，私が代わりましてお喜びの言葉とお礼の言葉を申し上げたいと思います。

写真20.　祝辞をのべる全国農業協同組合連合会常務理事田中隆氏

ご存知のように，わが国の農業は戦後急速に近代化して生産性が高まり，急速な発展を遂げたわけでございますが，そういう中で，いわゆる農薬の中の除草剤が果たした役割というのはまことに大きく，高く評価されなければならないと思うわけでございます。とくに昭和25年に2,4−Dが農薬登録されまして，これが本格的な除草剤の利用になったわけでございますが，これらの除草剤が普及されるにしたがいまして，田の草取りの過酷な労働から解放されていった農業生産者の喜びというものは，まことに大きいものがあるわけでございます。最近は，米の生産に要する労働時間というのはもう数時間になってしまっておるわけでございます。けれども，これはまったく，そういうきわめて有効な除草剤その他の農薬等の開発によるところが非常に大きいわけでございます。

また，39年には日本植物調節剤研究協会が設立されまして，さらにこの除草剤等の開発普及に大きく貢献されたわけでございまして，本日，植調会館が竣工するということで，これまたたいへんお目でたいことだと思っているわけでございます。

ただいま，農林水産技術会議の川嶋事務局長

さんのお話にもございましたけれども，日本農業のこれからの道というのは，まことに険しい道でございます。しかしながら，やはり今後ともこの近代化の道を逆戻りするということはできません。したがいまして，今後ともこの有効な農薬の開発普及ということが大いに期待されるわけでございまして，今までの農業近代化に果たした役割に対して，関係者の方々に多大な感謝を申し上げると同時に，今後とも新しい薬剤の開発に対するご努力をとくにお願い申し上げる次第でございます。

最近は，農薬に対する規制が非常に強くなってまいりました。残留毒性の問題であるとか，環境汚染の問題であるとか，いろいろ難しい問題がありますけれども，同時にまた多年生の雑草に対する防除の問題その他新しい問題が次々と起こってきておるわけでございまして，今後とも関係者の方々の絶え間ないご努力というものを特にお願いをいたしたいと思うわけでございます。

本日は，このお目でたい席にお招きいただきまして，お喜びと感謝を申し上げるチャンスを与えられたことを深く感謝すると同時に，皆様方のますますご発展とご伸張をお祈り申し上げまして，たいへん簡単でございますが，お祝いの言葉にかえさせていただきます。」

写真21. 乾杯の音頭をとる清水茂氏

つづいて，清水茂氏より，つぎのような乾杯の音頭により，祝宴に入った。

「それでは，ご指名でございますので，僭越でございますが，乾杯の音頭をとらせていただきます。

写真22. 鏡割りを行なう早川浩氏(都道府県農業試験場長会会長)

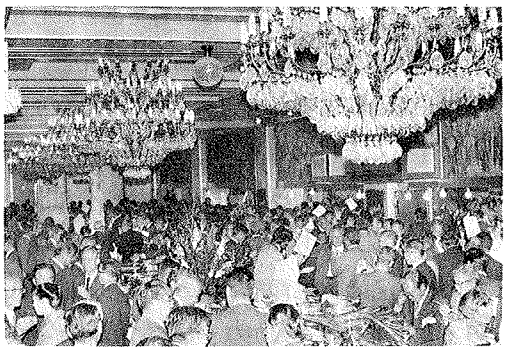

写真23. 超満員でにぎわう記念祝賀会会場

写真24. 万歳三唱の音頭をとる農事試験場場長岸国平氏

植物調節剤の利用開発普及三十周年を記念いたしますと同時に，これまでの開発普及にかかわってまいりました皆さん方のご努力に感謝するとともに，また将来のご健闘とご発展を期待し，それから今日受賞されました方々にお祝いを申し上げて，乾杯いたしたいと存じます。どうぞご唱和をいただきたい。乾杯！」

乾杯が終ると同時に，全国農業試験場長会会長早川浩氏により，2,4—D 協議会より提供された酒樽の鏡割を行ない，この祝賀会に出席した方々により祝宴をさらに盛り上げることができた。

なお，この祝賀会には，約 550 名が集まり実に盛大であった。祝宴も終りに近づき，農事試験場長岸国平氏の万歳三唱により，幕を閉じた。

最近の落葉果樹の植物生育調節剤

農林水産省果樹試験場栽培部栽培第 2 研究室長　山崎利彦

果樹は植物生育調節剤の応用範囲が広く，その恩恵を最も多くうけている分野である。しかし，その効果を非常に高く評価する意見と，そうでない場合がある。デラウェアにジベレリンを処理することによって，種なしデラウェアをつくる技術は，あたかも優秀な新品種を作出したに等しい成果であることは誰しも疑いのないところであろう。生育調節剤の効果を比較的低くみる人でも，ＮＡＡがなくなることによって，収穫前落果防止剤を失なった波紋をみれば，生育調節剤が果している大きな役割を理解することができよう。

生育調節剤を低く評価する意見は，生育調節剤に画期的な効果を期待しすぎた結果の失望の所産といえなくもない。あるいは，生育調節剤の欠点を覆いかくすほどの讃美論に対する反発もあろう。ともあれ，生育調節剤の利用は，植物の生長のリズムを基本的にかえることよりも，本来のリズムを尊重しつつ，ある発育の段階で有利なバイパスに誘導する手段と考えれば異論なく，有用な手法であろう。

生育調節剤の開発は，生産面からの切実な要望にこたえて行なわれるのが基本であろうが，薬剤が初めに存在して，その利用面を探索する例も多い。また，研究途次で主効果よりもむしろ副作用に着目して発展する場合も少なくはない。

生育調節剤の研究では，それらのいずれの立場も等しく重要であり，したがって，研究機関と薬剤供給メーカーとの緊密な協調が特に必要とされる。最近の例では，ウンシュウミカンに対するフィガロンの増糖効果などはよい例であり，つねに目的意識を持つことが，不可能と考えられていた夢を実現する道であることを，この例はよく示している。

落葉果樹の生育調節剤も，ここ数年の間にかなりの発展がみられた。最近の動きを作目別にたどってみよう。

1. ニホンナシ